OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『詩本草』考
Author(s)	新稲, 法子
Citation	語文. 1997, 67, p. 13-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68903
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『詩本草』考

新稲法子

はじめに

いにしえの神農は自らの舌を以て植物の薬となり得るかを吟味したというが、柏木如亭はその詩嚼で様々な食物を味わい、詩料となり得るかを試みた。寛政六年、三十二歳にして家職を辞し、半生を地方に遊歴した江戸生まれのこの詩人は、晩年、寄寓先で味わった美味を一編の漢文随筆に綴っている。如亭の死後、文政五年に上梓された『詩本草』である。自ら記す引には次のようにいう。

余が性、味を嗜むこと甚だし。而して詩を嗜むこと更に味を嗜むことより甚だし。少小にして厳慈に棄てられ、孑然一身、手に一能無く、惟口是れ饑る。青年にして家を去り、詩を売りて四方に餬口し、数十年来憑りて死せず。止に憑りて死せざるのみに非ず、到る処、家居の致す可からざる味に飽くことを得たり。以謂らく、是れ亦一身の清福なりと。(1)

「惟口是れ饑る」と記した如亭生来の資質と、如亭に「清福」をもたらした近世後期の漢詩人の生活形態が、この瀟洒な書物を生みだしたといえよう。本書はかつて永井荷風に「江戸詩人詩話中の白眉」(2)と称えられながらも、略注(3)の他にまとまった研究がないままであった。しかし近年、揖斐高氏が箋注を手掛けられ、(4)今後本格的な研究がなされることと思われる。本稿は、その先駆けとして、現在よく知られているとは言い難い本書を紹介し、その内容に考察を加えるものである。

1

先ず『詩本草』全四十八段の内容を一覧にして掲げる(表1)。このうち、第七段の全文を引用してみよう。

蕎麦は信濃を以て第一と為す。其の香味、他州の及ぶ可きに非ざる也。嘗て書を黒坂大夫の後園に読む。厨下頻頻之を供す。因りて蕎麦の歌を作る。云く、

江都人世極楽国　江都は人世の極楽国
口腹何求不可得　口腹何を求めてか得可からざらん
時新魚菜尚奢靡　時新の魚菜は奢靡を尚び
燕席争供如奉勅　燕席争ひ供して勅を奉ずるが如し
昇平士女不知愁　昇平の士女　愁を知らず
食前方丈擬公候　食前方丈　公候に擬す
信山蕎麦無物敵　信山の蕎麦物の敵する無し
相魚駿茄遜百籌　相魚・駿茄　遜ること百籌

表1
全四十八段の内容一覧

●自作の詩を掲載する
○自作の詩の一部または題名を掲載する
◎自らの詩論を掲載する
■他の詩人の詩を掲載する
□他の詩人の詩の一部または題名を掲載する

1白粥
2酒
○3酒旗
◎4酒茶と詩文
□5宇治茶
6麦茶
●7蕎麦
□●8蔬菜
■□○9松茸
10茸狩りの怪異
●11筍
●12鮎
●●13鯛
●14海茸
●15蟹
●16太刀魚
●17鰹
●18鮭
19松魚
●20鯖
○○21黄頬魚
●22鰒魚
23比目魚
●24鮒魚
●25鯉魚湯その一
26鯉魚湯その二
○○27鯉
28醢その一
29醢その二
●●30鰡
31塩漬けの魚
○□□□32河豚
33蘆荻
□34小禽
●35桃の実と桑の実
◎36詩論その一
◎37詩論その二
●38京の名産
●39鳥獣
●(二十首)40吉原詞
●41『詩本草』成る
●42銘酒李花春
●43川魚
44茶粥
45魚飯その一
46魚飯その二
□●(十首)47果物
48山人論

蕎麦について述べているこの段は、『如亭山人初集』に収められている「蕎麦歌」を引用して締めくくられている。『詩本草』の大半の段は、このように如亭自作の漢詩に文章を添えるという体裁を取っている。

自作の漢詩の他、本邦・彼邦の詩人の作を引用したり、自らの詩論を展開している段もあるが、漢詩について全く触れていない段は稀である。漢詩のない段の内容を検討してみると、先ず第一段の白粥に関する記事がそうだが、如亭にとって白粥は文化五年の富士山で遭難した思い出にまつわる味であり、漢詩がないのは「毎に一詩を作りて是の事を紀さんと欲するも、一たび情景を思へば、心悸(おのの)き手顫(ふる)へて筆を秉ること能はず」と自ら記している理由からである。第十段は茸拾いの怪異談を記しており、詩作の話題から一時離れているが、前段の茸の話題にちなんで書き添えたものであろう。また第十九段、第三十三段は、それぞれ「松魚」「葦」字の考証で——詩語としての考証であり詩作にまつわる話題といえる——詩は附されていない。第二十三段は比目魚を始めとする海水魚に関する段だが、「余も亦詩数首を作る。今其の稿を失す」と述べており、本来ならば自作の詩が附されるはずであった。また第四十四から第四十六段に関しては、第四十四段始めに「研北一事を省念すれば、則ち一段を筆す。多く欲するところを説くも、粥飯に及ぶこと莫し。これ欠事に似たり。今、茗粥・魚飯の二方を附す」と記されている。茶粥・魚飯の料理法を書き加えたのであるが、これらを題材にした詩は如亭の詩嚢になかったのであろう。最後の第四十八段は自跋とでもいうべきもので、他の段とは性格を異にする。

このように見ていくと、自作の詩を備えていない段の大半はそれ

ぞれの理由があり、前掲の第七段を典型とする、如亭自作の漢詩とそれにまつわる漢文が『詩本草』の基本の構成といえよう。収められた詩は既にあるものから選び、本書のために改めて詠む、ということはなかったようである。『詩本草』に収められた如亭の作品の殆んどは、生前上梓した『木工集』（寛政五年刊）・『如亭山人集初集』（文化七年刊）、死後『詩本草』と共に梁川星巌によって刊行された『如亭山人遺稿』、『今四家絶句』（文化十二年刊）中の『如亭先生百絶』に見ることが出来る。晩年に当たって、如亭はこれらの詩集に収められたもの、また未収の作品から口腹に関するものを選び出し、それぞれの詩にまつわる思い出などを書き添えたのである。なお、第四十段の吉原詞は本草とは無関係だが、若き日の思い出としてこの書に収めたのであろう。

2

本草を題材にした韻文を収める作品は、『詩本草』に先行して刊行されている。箋注で『詩本草』に類似する書名を持つものとして紹介された『和歌食物本草』（寛永七年刊、別名『歌本草』）・『薬種知便草』（宝暦三年刊、宮崎如銑編、別名『俳諧本草』）・『絵本草』（宝暦七年刊、土岐其然編、絵入り俳書）である。

この他、『詩本草』に類似する書名を持つものとして、乾隆四年（元文四年）刊、唐本の『本草詩箋』[5]がある。本草書の目録そのままを詩題にとった詠物詩といった趣の本で、各々の七言律詩に本草に関する情報を収めている。『和歌食物本草』同様、本草学の知識を詠むことに重点が置かれ、文学性に富むという類の書物ではないが、本草と漢詩という組み合わせは注目される。

ただ、こういった唐土の文人の作品も、既に指摘されている作品同様、如亭が見ていたかどうか実際の影響関係は本文を検討してみただけではわからない。

箋注には、「とくに和書の『歌本草』『俳諧本草』『絵本草』という書名は、『詩本草』とよく似ているが、如亭にそうした書物についての知識があったかどうかは分からず、内容に緊密な類似性があるわけでもない。おそらく偶然の符合であろうか。」とある。

しかし『詩本草』と類似の書名を持つこれら一連の書物には、本草を題材にした韻文という構成において『詩本草』と共通する点がある。箋注で影響関係を指摘されている『本草綱目』や『問情遇寄』にはそのような発想はない。指摘された書物のうち、『和歌食物本草』は版を重ね、よく読まれた本でもある。『詩本草』への直接の影響はないにしても、こういった書物が生まれ、享受された背景は無視できないのではないだろうか。『詩本草』も、漢詩を本草書の枠組みに沿って並べるが如き構成を取っている点では、これら先行の書物と同列上にあるといえる。本草学が摂取される過程で、和歌・俳諧・漢詩の作者の間に、本草書の見出し項目を詠物の題材に用いるという発想が生まれ、『歌本草』・『俳諧本草』・『絵本草』などの書物が成立したと理解すべきであろう。『本草詩箋』は、そういった発想が本邦・彼邦を問わずあったことを示している。

清の李漁、号は笠翁の『間情偶寄』が、箋注で『詩本草』に影響を及ぼした漢籍として『本草綱目』と共に指摘されているが、この書の「頤養部」には「調飲啜」の章が有り、「養生家必需之物」として李杲の『食物本草』が推されている。またその末尾には、「以上の諸薬、笠翁自り創む。当に呼びて笠翁本草と為すべし」と、

「笠翁本草」という語が記されている。

本草学は養生や飲食の楽しみとともに文人趣味の一端としても取り入れられていった。『詩本草』には『本草綱目』の他に『医心方』や『東医宝鑑』、また具体的な書名は記されていないが医書がしばしば引用されている。しかしながら如亭は特に本草学に造詣が深いというわけではなかった。『詩本草』に記された知識は特殊な物ではなく、同時代の文人たちが共有していたのであろう。

3

当時の詩壇の趨勢もまた、『詩本草』に反映している。詩人如亭が江戸にいた天明・寛政期、詩壇は詩風の転換期を迎えていた。市河寛斎の主宰する江湖詩社では、それまでの盛唐詩を規範とする古文辞学の詩風から離れ、南宋詩を参考にしながら日常生活の微細な感情を詠む新しい詩風を模索していた。若い如亭は、寛斎の下で江湖詩社を代表する詩人として、先鋭な作詩活動を行っていたのである。

新しい性霊説の詩論に基づいて、眼前の景物をありのままに詠むためには、卑近な物、本邦独自の物をも対象にせざるを得なかった。酒旗について考証し、それがわが国の酒林だとして

頃刻雲開村店出　頃刻雲開きて村店出づ
茅簷一点酒林青　茅簷一点酒林青し

という自作の詩句を添えている第三段や、第十七段「松魚」・第三十三段「蒿」といった語の考証は——勿論清朝の考証学の影を認めるにしても——、新しい詩論に基づく興味のあり方だろう。如亭と共に江湖詩社で新詩風を鼓吹した大窪詩仏の『詩聖堂詩話』（寛政十一年刊）や、新詩風に先鞭をつけた釈六如の『葛原詩話』（天明七年刊）といった、性霊派の詩学を摂取した詩人たちの詩話にも同様の考証が見られる。伝統的な詩語と、その表すものが本邦の何に一致するのかを考証する必要が生じたのである。

また本邦の日常生活を詠むためには新奇な詩料も用いることになる。『詩聖堂詩話』から一段を引用しよう。

我が邦卯の花と称する者有り。開くに四月初を以てす。灌仏の前日、都下の俗、此の花及び新茗を売る。其の仏に供するが為なり。娯菴の「首夏」に云ふ、

春事闌珊不住些　春事闌珊として住めず
雨余濃葉護窓紗　雨余の濃葉窓紗を護る
両竿紅日眠初醒　両竿の紅日眠初めて醒む
聴取門前売卯花　聴取す門前卯花を売るを

卯の花の詩に入る、娯菴を始めと為す。(6)

娯菴とは菊池五山のことである。この段など、『詩本草』で「池五山取りて詩に入る」と、「ばん」や「くいな」を詠んだ菊池五山の和歌題の漢詩を紹介する第三十四段と、同根であるといえるだろう。

4

既に指摘されている『本草綱目』・『間情偶寄』以外に『詩本草』に影響を与えたと思われるのは、『五雑組』の物部にあたる巻九ないし巻十二である。

『詩本草』の麦茶について述べた第六段は、自作の詩が添えられていない段の一つだが、

謝在杭曰く、菉豆を以て微炒し、沸湯中に投じて之を傾く、其

の色正に緑、香味も亦新茗に減ぜず。村中に宿し茗を覓めて得ざる者、此を以て代ふ可しと。余、大麦を炒して湯と為す。独り香味の茗に減ぜざるのみならず、又能く食を消す。鳥魚肉を過食するときは、則ち必ず数甌を飲む。

と唐土の茶豆茶を引用して書き始めている。ここでいう謝在杭とは、『五雑組』の作者謝肇淛、字は在杭のことであり、この段の「茶豆を以て微炒し」から「此を以て代ふ可し」までは『五雑組』の該当部分、流布している和刻本でいうと巻十一の四丁裏、第十三段そのままの引用である。(7) 如亭が『五雑組』を見ていたことは明らかだといえよう。

また酒について述べた『詩本草』第四段の前半を例に挙げよう。

世俗、酒の佳なる者に逢へば則ち曰ふ、必ず参州と。悪なる者に逢へば則ち曰ふ、必ず摂州と。悪なる者は真箇に脛あらずして六十州を走る。参州の酒も亦未だ尽くは濫悪ならず。人只殺鬼魅の名高きを知りて、別に苦冽酒人の吸を快くするに足る者有るを知らず。但し殺鬼魅其の性兇愕、啻に無刃の斧斤のみならず、僅かに一口を嚙めば頭已に岑岑然、是れを以て名を輿隷凡下の間に得たり。豈に一州の所造悉く皆殺鬼魅ならんや。

殺鬼魅とは鬼殺しをいうのであろう。この段も『五雑組』の酒についての記述を下敷きにしたのではないかと思われる。巻十一の五丁目表、第十七段目から酒についての記述が始まっているが、第二十三段には

江南の三白は脛あらずして走ること九州に半ばするなり。

と「脛あらずして走る」という表現があるし、第二十一段には

京師薏酒有り。薏苡実を用いて之を醸す。淡くして風致有り。然れども酒人の吸を快くするに足らざる也。

と「酒人の吸を快くする」ともいう。また第二十二段、

京師の焼刀は輿隷の純綿也。然して其の性兇愕にして、啻刃無きの斧斤のみならず。

の「輿隷」・「兇愕」・「啻刃無きの斧斤のみならず」の語まで一致するのである。

『五雑組』の酒の段には、この他に、特に珍しい語というわけではないが、第二十四段に

蘭渓に至りて濫悪極まる。

第二十段に

酒は淡を以て上と為す。苦冽之に次ぐ。甘き者は最も下なり。

と「濫悪」・「苦冽」の語も用いられている。『五雑組』ではこの後、第三十段に酒を量る単位に関して記しているが、『詩本草』第二段で如亭が自らの酒量について記しているのと関わりがあるのかもしれない。

『五雑組』は巻一・二が天部、巻三・四が地部、巻五至八が人部、巻九至十二が物部、巻十三至十六が事部から成る大部な書物で、その豊富な話題は近世の諸書によく引用されている。しかし如亭は『五雑組』を引用した類書等を介さずに、直接唐本か和刻本によったと思われる。『詩本草』ではこの酒の段に限らず、類書に引用されにくい文章の修辞が共通しているからである。

これらの段に関してはいずれ箋注で明らかにされることであろうが、(8) 『詩本草』には他にも『五雑組』の影響と考えられる段がある。例えば、第十六段、太刀魚について述べたもの。

東海に大刀魚有り。即ち閩中の帯魚也。春夏の交、味頗る美な

り。余好みて之を啖らふ。然れども人家賤視して客に供することを屑しとせず。往年道傍の小店に喫す。酔後戯れに小詩を書き、店小二に与ふ。

吶喊声銷天日麗　吶喊の声銷えて天日麗し
波濤海静太平初　波濤海静かなり太平の初
折刀百万沈沙去　折刀百万沙に沈み去り
一夜東風尽作魚　一夜の東風尽く魚と作る

ここで如亭は太刀魚を指して「閩中の帯魚」といっている。『閩書南産志』には帯魚の項があるが、語句や内容の一致はない。『五雑組』巻九を繙くと、第九十三段は帯魚の段で、

閩に帯魚有り。長さ丈余、鱗無くして腥し。諸魚の中最も賤しき者なり。客に献れども以て俎に登さず。……而れども閩人此の味を賤しみ視て、常に以て之を応ずること無き也。

とあり、この書き出しの「閩に帯魚有り」という部分を用いたとすれば、『詩本草』の「閩中の帯魚」の意味が明らかになる。如亭は勿論実際の帯魚を見たことはなかっただろうが、「帯」の字を以て名付けられ「鱗無くして腥」く、賤魚として扱われている唐土のこの魚に、本邦の太刀魚をなぞらえたのであろう。「賤視」の語も共通する。

また塩干の魚について記した第三十一段を見てみたい。

越前の答剌・越後の失熇弼吉・加賀の膀蔑乙皤失・駿河の屋吉貲達乙美なり。然れども之を若狭の骨達乙に較ぶれば猶ほ数塵を隔つがごとし。答剌は嬌妻の如く、失熇弼吉は艶妾の如く、膀蔑乙皤失は俊婢の如く、屋吉貲達乙は名妓の如し。骨達乙は則ち千金の小姐の如し。愛す可くして狎る可からざる也。……

如亭は『詩本草』にも収めた「吉原詞」の作者として知られ、遊歴の先々でも艶聞に事欠かなかったという。干物の名品それぞれの味覚を女性に喩えて表現するこの段は、いかにも如亭の面目躍如たるものがある。この段を、おそらく如亭は、『五雑組』巻十一にある第五十一段に触発されて認めたのであろう。

上苑の蘋婆・西涼の蒲萄・呉下の楊梅美なり。然れども之を閩中の荔支に校ぶれば、猶ほ数塵を隔てて在るがごとき也。蘋婆は佳婦の如く、蒲萄は美女の如く、楊梅は名伎の如し。荔支は則ち広寒の中の仙子なり。水肌玉骨、愛す可くして狎る可からざる也。

『五雑組』では果物であるが、如亭はそれを換骨奪胎し、わが国の魚の干物に置き換えているのである。

酒量についての第二段、麦茶について述べた六段、塩漬けの魚に関する三十一段は、これといった理由無く如亭自作の詩が添えられていなかった。如帝が『五雑組』の対応する段を読み、既作がないのに書き留めた、と考えれば、これらの段に詩がないのも納得がいく。『詩本草』執筆時、如亭の手元には『五雑組』がなかったのではないだろうか。

5

『詩本草』引には次のようにいう。

偶数十事を省念して、録して数十段を得たり。客の戯れに余を以て詩中の時珍と為す者有り。輒ち酒を呼びて之を落す。名付けて『詩本草』と曰ふ。

時珍とは、『本草綱目』の著者李時珍のことである。『詩本草』は

まず本草の題があって記されたのではなく、既にあった詩作を本草書を装った枠を用いて編集した書である。如亭が食味を詠んだ詩は多い。自作の詩の中から『詩本草』にふさわしい作品を選び出すという作業の際に、その排列は何に因ったのであろうか。編年体にはなっていない。本草書なり類書なりを手元に繙きつつ、既に作った自らの作品を思い出し、文章を付けていったと考えるのは、あながち不自然ではないだろう。

『詩本草』の排列は『本草綱目』には対応していない。類書のたぐいにも、管見にして一致するものを知らない。如亭を助け、『詩本草』の触媒となった書物は『五雑組』だったのではないか。『詩本草』の前掲の文章に影響を与えただけでなく、『五雑組』はその成立にも関わっているようなのである。

それを窺わせるのは箋注に紹介されている『詩本草』如亭自筆草稿本である。草稿は引と全三十一段からなり、その排列順は現行の刊本とは異なり、さらに切り張りがなされているという(表2)。

『詩本草』が影響を受けていると思われる『五雑組』巻九から巻十一は「物の部」である。先に引用した『詩本草』第四段に対応する『五雑組』の記事は巻十一、五丁裏から六丁裏に懸けてである。今これはしばらく措くとして、物の部の始まる巻九を見てみる。龍・鳳・獅豸(カヂ)の考証に始まり、太刀魚について記した『詩本草』第十六段に対応する記事は巻九の二十九丁裏、第九十三段にある。如亭が仮に『五雑組』のこの項を見て『詩本草』を認めているとしよう。『五雑組』を読み進んで行くと程無く三十一丁表、第九十六段の鰒魚の段に行き着く。『詩本草』第二十二段を如亭は

鰒魚(アワビ)は即ち王莽が咽(くら)ふ所の者、其の殻を石決明と曰ふ。海に沿

表2　『詩本草』自筆稿本と『五雑組』の対応

数字は板本でのそれぞれの段を表す。『詩本草』草稿切り貼りの位置は同列の本文に対応する。

『詩本草』草稿本文	『五雑組』〈巻九〉	『詩本草』切り貼り	『五雑組』〈巻十一〉
引			
1			
2 酒			
3			
4 酒茶と詩文			
7		5 宇治茶	1 茶
8		6 麦茶	(13 菜豆茶)
9			16 茶
10			17 酒
27			〜
13			32 酒
14			
15	〜		
16 太刀魚	93 帯魚		〜
28	〜	19	
17		39	
18		31 塩漬けの魚	51 果物
22 鰒魚	96 鰒魚	20	〜
23	〜	21	
32 河豚	112 河豚		
33	〜		
34			
40		38	
		30	

ひて所在之有り。

と書き出しているが、『五雑組』巻九にもまた

北地に鰒魚を珍とす。毎枚三銭なり。漢の王莽鰒魚を啗ふ。…

…韻譜に云ふ、一名は石決明と。

と、如亭が記した情報はある。第九十九段には鯉魚の段があるが、鯉が龍に成るという説に関して述べたもので、鯉魚湯について記した『詩本草』の段との関連は見られない。さらに『五雑組』にはこの後三十六丁裏、第百十二段・第百十三段に河豚についての段がある。『詩本草』第三十二段は、

河豚は美にして人を殺す。一に西施乳と名づく。又猶ほ之れ江瑶柱の西施舌と名づけ、蠣房の太真乳と名づくるがごとし。皆佳艶の称也。……

といい、『五雑組』巻九では

河豚最も毒ありて能く人を殺す。

また

其の脂を西施乳と名づく。

ともいう。

『詩本草』の太刀魚・鰒魚・河豚という順序は『五雑組』の該当箇所の掲載順と同じになっている。鰒魚や河豚の別名といった知識は、『五雑組』によらずとも他の類書などでも得ることはできる。しかし太刀魚・鰒魚・河豚の排列順が一致するのは単なる偶然ではないだろう。菉豆茶の段で如亭が『五雑組』を見ていたのが確実であることを考え合わせると、こういった知識もわざわざ『五雑組』以外の書で得なくとも、おそらくは手元にあったこの書から得たと考える方が自然である。死後、如亭の手元には僅かな書物しか残されていなかったというのであるから。

次に切り張りに関して——切り張りが単純に草稿の前から順番に記されたと判断してのことだが——検討してみる。『詩本草』の茶に関する第五段には次の条がある。

其の名品と号称する者、佳なる者無きに非ず。而れども文房の清賞に当たらず。只飯を澆ぐに堪へたる耳。

これに対応する『五雑組』は巻十一、二丁裏の第五段で、

今茶品の上なる者は松蘿也、虎丘也…六合・鴈蕩・蒙山の三種は滞を祛ること功有りて色香称はず。嘗に是れ薬籠中の物なるべし。文房の佳品に有らざる也

とある。「文房の清賞」など、『詩本草』への影響が指摘されている『間情遇寄』にも出てくる語で、特に珍しくはないが、『五雑組』の「文房の佳品に有らざる也」によって思い出した可能性も考えられる。すぐ後の四丁裏に『詩本草』六段引用の菉豆湯の記事があるからである。このあと『五雑組』十六丁裏に『詩本草』第三十一段と対応する、果実を女性に例える段がある。

『詩本草』では宇治茶・麦茶・塩漬けの魚という順、『五雑組』ではそれぞれに応じた茶・菉豆茶・果物という順に続いている。則ち、切り張りに関しても、『詩本草』の第四段以外は、対応する『五雑組』と同様の順に認められていることになる。

太刀魚・鰒魚・河豚、また宇治茶・麦茶・塩漬けの魚というそれぞれの排列は、本文を書き終えてから切り張り部分を書き足したと考えるのが普通であろうから、16太刀魚・22鰒魚・32河豚・5宇治茶・6麦茶・31塩漬けの魚の順になる。この順序は現行の刊本ではその数字が示すように入り組んでいるけれども、各段が対応する

『五雑組』の記事は、巻九の二十九丁裏から始まって巻十一の十六丁裏まで、逆行せず掲載されているのである。

この排列の一致は、如亭が『五雑組』を『詩本草』の枠組みづくりに用いた証左といえよう。草稿の段階で如亭は『五雑組』を繙きながら自らの既作を思い起こし、『詩本草』を綴っていったと推測できるのである。

6

「手に一能無く、惟口是れ饞る」とは、如亭が『詩本草』の引に自ら記した言葉であるが、『詩本草』の他の段でも如亭は「饞」の字を何度か用いている。第十七段は如亭の最も好んだ魚、鰹について記すが、この段の七言律詩は「饞」字を用いているものの一つである。

東海旧蕩風吹緑　東海の旧蕩　風緑を吹く
上店時新砺赤玉　店に上る時新　赤玉を砺る
正是江都清和天　正に是れ江都清和の天
此時口饞遂所欲　此の時口饞所欲を遂ぐ
去年四月在北方　去年の四月北方に在り
越海到処不可嘗　越海到る処嘗む可からず
今日関外一咀嚼　今日関外一たび咀嚼す
大勝夜夢向家郷　大いに勝れり夜夢家郷に向かふに

この七律「駿州道中松魚を食らふ」は『如亭山人遺稿』では冒頭を飾る。ここで「口饞」はいやしい口、ひいては詩人自身を指す語として用いられている。第三十五段は舞坂で桃を、桐生で桑の実を堪能した思い出を記しているが、

偶此の二事を挙げて二三の友に告ぐ。余が饞を哂はざる者莫し。

是に于いて和盤托出して更に世人の哂を広む。

と結ばれ、ここでも如亭は「饞」なる人物として描かれている。

祇園の田楽豆腐に始まって京都の名産を延々と書き連ねている第三十八段は、繁華の都市の食物を列挙している唐土の地誌を読むかのようだが、

若し夫れ酒楼の品は茶碗蒸を以て第一と為す。茶碗蒸は鷩を以て第一と為す。到る処復た敵する者無し。惟江戸の蒲焼以て之に当たるに足れり。

と臨終の地の茶碗蒸と故郷の蒲焼を並び称している。どちらが美味か、如亭は決断を下さずに次のように締めくくる。

味を知るの真なる者に非ざれば蓋し言い難き也。姑く之に書して以て両都に遊ぶことの久しくして老饞余に同じき者を竢つ。

如亭は自らの「饞」を自負しているのだ。

第四十三段もまた様々な河魚を列挙し、

撥辣奮躍、毎日吾が厨下に来たりて割烹の法令を聴く。方に饞腸清福の時也。

と自らを「饞腸」の語で表している。

『詩本草』・『如帝山人遺稿』を上梓するため奔走したのは、生前如亭からそのことを託されていた弟子の梁川星巌であった。その作品に『詩本草』の影は無いだろうか。星巌もまた、遊歴の先々で出会った美味を詩に詠んでいる。しばしば長い文が附されたそれらの作品は、さながら『詩本草』の一段を見るが如くである。また星巌は「鯉魚膾を食して如亭山人を懐かしむこと有り」(『星巌丙集』巻三)・「紅葉鮒魚の歌」(『星巌丙集』巻六)、如亭を中心として

江戸の江湖詩社の詩人たちに広まった題材である鰹を詠んだ「鉛錘魚を食らひて感有り」(『星巌丙集』巻八)・「松魚を食らふ」(『星巌丙集』巻十)といった食味の詩に「饞人」「饞口」と、この「饞」の字をしばしば用いている。

詩人星巌は如亭の「饞」癖に気付いていたのであろう、これら星巌の「饞」字は、『詩本草』に代表される如亭の口腹の詩文に由来する。その「鯉魚膾を食して如亭山人を懐かしむこと有り」には

(略)

昔我薄遊東海浜　昔我薄遊す東海の浜
春茄臘筍恣嘗新　春茄・臘筍恣(ほしいまま)に新を嘗む
松魚上市寧辞貧　松魚市に上りて寧ぞ貧を辞さんや
不惜一頭抛千緡　惜しまず一頭千緡を抛うつことを
如亭山人饞最老　如亭山人饞最も老
対床相呼闘百珍　対床相呼びて百珍を闘はす
意気似欲無郇国　意気郇国無からんと欲するに似たり
鄒平憲章何足云　鄒平の憲章何ぞ云ふに足らん(9)

と如亭を「饞最も老」と詠んでいるのである。

星巌がそうであった如く、如亭の死後も漢詩人たちは潤筆の為にしばしば地方に遊歴した。彼らもまたそれぞれの土地で出会った美味を詩に詠んでいるが、『詩本草』を継ぐ書を認めることが出来る、如亭の如き詩嚢を持った「老饞」はついに現れなかったようである。

注

(1) 原漢文。以下同様。富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集日本漢詩』八(汲古書院、昭和六十年)所収。

(2) 『断腸亭日乗』大正十四年五月八日

(3) 鈴木瑞枝「柏木如亭『詩本草』ノート」(『安田学園研究紀要』第十九号、昭和五十四年)

(4) 揖斐高「『詩本草』箋注　その一」(『太平詩文』第三号、太平書屋、平成八年八月)

(5) 財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵。

(6) 『日本詩話叢書』三(文会堂書店、大正十年・鳳出版、昭和四十七年復刻)所収。

(7) 古典研究会編『和刻本漢籍随筆集』一(汲古書院、昭和四十七年)所収。

(8) 箋注を読んだ筆者が揖斐高氏に手紙を送ったところ、「『詩本草』と『五雑組』の関係、おっしゃる通りで、酒や菜豆の項の対応など、小生も気付いておりました。」という返書を戴いた。

(9) 『詩集日本漢詩』十五(汲古書院、平成元年)所収。

付記

本稿提出後「『詩本草』箋注　その二」(『太平詩文』第四号、太平書屋、平成八年十二月)が出て、第九段まで注が施された。

——兵庫女子短期大学非常勤講師——